埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Study of the Relation Temperament, Praise-Seeking Need and Rejection-Avoidance Need

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-03-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小島, 弥生
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1169

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の気質的基盤に関する検討

― Gray の BIS/BAS モデルを用いて ―

A Study of the Relation Temperament, Praise-Seeking Need and Rejection-Avoidance Need

小　島　弥　生
KOJIMA, Yayoi

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の基盤にどのような気質が想定できるかについて、本研究ではGray（1970, 1982）によるBIS/BASモデルを用いて検討した。拒否回避欲求は行動抑制系のBISを基盤とし、賞賛獲得欲求は行動賦活系のBASを基盤とするという予測のもと、尺度得点間の相関関係を検討した。予測と一致し、賞賛獲得欲求はBASとの間に中程度の正の相関が、拒否回避欲求はBISとの間に高い正の相関が、それぞれ示された。

問題と目的

本研究の目的は、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求という２種類の自己呈示上の目標設定に関する欲求の基盤となる気質傾向として、Gray（1970, 1982）の気質モデルで示されている２種類の動機づけシステムが該当するかを検討することである。

小島・太田・菅原（2003）は、人が自己呈示（自己に関する特定の印象を他者に抱かせるためにとる行動の総称）においてどのような目標を抱きやすいかについて、公的自意識の強い人にみられる２種類の欲求（菅原, 1986）の概念を基に２種類の尺度を作成している。１つが賞賛獲得欲求であり、自らの肯定的な側面を他者に認めてもらいたいという自己呈示上の目標設定を抱く傾向である。もう１つが拒否回避欲求であり、自らの否定的な側面を他者に知られることで他者から嫌われることを恐れ、そのような否定的な側面を他者に知られないようにすることを自己呈示上の目標設定として抱く傾向である。この２つの傾向は互いに独立しており、かつ、誰もが多かれ少なかれもっている個人差傾向である。菅原（2004）によると、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は、車の運転におけるアクセルとブレーキのように、対人場面における自己呈示を調整する機能をもつ。他者から自らの何かを高く評価されることは心理的、物理的にさまざまなメリットがあるため、人は自らの社会的な評価を高めようとする。これが賞賛獲得欲求の機能（車の運転でのアクセルと同じ機能）であり、自らの評価を高めるために自己の何らかの良い側面を他者にアピール

キーワード：賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、気質、BIS/BAS
Key words ：praise-seeking need, rejection-avoidance need, temperament, BIS/BAS

する行動を促す。しかし、他者の視線に自らをさらすことは、他者からの否定的な評価を招くリスクも同時に持ち合わせる。そこで、リスクを管理し、自己アピールにあたり時にはブレーキをかけ、自己の失態や欠点を隠ぺいする必要もある。これが拒否回避欲求の機能（車の運転でのブレーキと同じ機能）であり、自己をアピールすることによって見せたくない側面まで見せることを回避するために、自らを他者にさらけ出すことを抑制する役割を果たす欲求となる。

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が人間の発達の過程でいつ、どのように個人内で起こり、安定するかという点については、これまでに検討はされていない。人が社会的な環境の中でさまざまな他者と接する中で、自らの行動や態度に対する他者からの肯定的な評価を得て多くのメリットを認識したり、あるいは、他者からの否定的な評価を受け多くのデメリットを認識したり、等の経験を重ねることで、ある個人の中で賞賛獲得欲求や拒否回避欲求が強まったり弱まったりし、やがて個人内である程度、安定したパーソナリティ傾向となることが仮定される。しかし、パーソナリティの形成に関する理論から考えると、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の個人内での安定性に関しては、その人の生まれ持った気質が影響する可能性があると思われる。

数多くあるパーソナリティに関する理論のうち、本研究ではGray（1970, 1982）の気質モデルに着目する。国里・山口・鈴木（2007）によれば、近年、中枢神経活動の計測方法が発展するのに伴い、既存のパーソナリティ理論を神経科学の枠組みで捉え直す探索的な試みが行われているが、多くのパーソナリティ理論がその理論を説明する神経学的なモデルを仮定していないため、神経科学の知見とパーソナリティ理論との間のインターフェースとなる理論を必要とするという。このインターフェースとして国里他（2007）は気質理論を用いることを提唱している。なぜならば、気質はパーソナリティを構成する要素の１つであるとともに、その特徴である「①比較的安定的で、パーソナリティ特性の根幹を成す、②幼少期の早い段階から現れる、③動物研究において、対応関係をもつ行動特性がある、④自律神経系や内分泌系といった生理学的反応もしくは大脳生理学的、遺伝的な諸要因と関連している、⑤人生経験などの肝要刺激と遺伝子型の相互作用によって変化する」（髙橋, 2013, p.78）という性質から、気質は神経科学的な基盤を有すると捉えることが可能だからである。よって、本研究で賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の形成に関わる気質を検討することには、一定の意義があるだろう。

さて、Grayの気質モデルでは、主に２つの動機づけシステム[1)]の競合により人間の行動が制御されることを仮定している。１つがBehavioral Inhibition System（BIS；行動抑制系）と呼ばれるシステムで、新奇性刺激や条件づけられた罰、あるいは無報酬の信号によって活性化するシステムとされている。このシステムが活性化することで進行中の行動が抑制され、潜在的な脅威に対する注意が喚起され、また不安を中心とするネガティブ感情が生じる。Gray（1982）によると、BISは脳のうち中隔・海馬システムへ投射するセロトニン神経系と関連することが想定されている。もう１つの動機づけシステムがBehavioral Activation System（BAS；行動賦活系）と呼ばれるシステムである。BASは報酬および罰の不在を知らせる刺激を受けて活性化される

動機づけシステムで、このシステムが活性化することで目標を達成するための接近行動が引き起こされるという。BASと関連する脳内システムとしては中脳辺縁系のドーパミンシステムが想定されている（Gray, 1987; 八木訳, 1991）。BISとBASは相互に独立しているシステムであるが、相互作用することである特定の行動が生起すると仮定されている。

Grayの理論では、BISは不安、BASは衝動性として表現されており、BISとBASを測定する尺度は複数の研究者により開発されているが、どの尺度が有用であるかについての一定の見解は得られていない（国里・山口・鈴木, 2007）。本研究では、Carver & White（1994）の邦訳版として作成された髙橋・山形・木島・繁桝・大野・安藤（2007）のBIS/BAS尺度を用いて、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と気質との関連について検討したい。Carver & White（1994）の尺度はBISが１因子構造であるのに対し、BASが３つの下位因子（Drive；駆動、Reward Responsiveness；報酬反応性、Fun Seeking；刺激探求）をもつというアンバランスな構造の尺度であるが、他の尺度と比べてGrayの理論と適合していること、比較的少数の項目でBISとBASの測定を可能にしていることから、この尺度の邦訳版を用いることとした。

冒頭にも述べたように、本研究の目的は、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の基盤となる気質傾向として、BIS/BASが該当するかを検討することである。賞賛獲得欲求は他者からの肯定的な評価の獲得を自己呈示上の目標設定とする個人傾向であり、その気質的な基盤は報酬に対する接近を示すBASであると予測できる。一方、拒否回避欲求は他者からの否定的な評価の回避を自己呈示上の目標設定とする個人傾向であり、その気質的な基盤は現状では存在しない罰（つまり、他者からの否定的な評価）に対する脅威の活性化と関連するBISであると予測できる。したがって、本研究の仮説は、賞賛獲得欲求はBASとの間に、拒否回避欲求はBISとの間にそれぞれ正の相関関係を示すこととする。

方法

調査時期と調査参加者

2013年１月、４月および2015年４月に東京都内の私立大学計３か所において、心理学の授業時間の一部を利用し、調査参加者を募集した。いずれの調査時期においても調査への参加はボランティアでの協力を求めた。ただし2013年４月と2015年４月の調査においては、希望する参加者には調査の個人結果の一部を開示することを明示したため、個人が識別できる番号を予め聞き出した。そして、調査の目的は回答者全体の傾向を調べるためのもので個人を特定することはないことを事前に説明し、承諾を得た者のみ質問項目に回答するように求めた。

質問紙の内容

調査時期によって質問する内容に違いがあったが、３時点で共通する内容であり、本研究の分析対象とした質問項目は以下の通りであった。

１）賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島他, 2003）

賞賛獲得欲求９項目、拒否回避欲求９項目の計18項目からなる尺度に対し、「1.あてはまらない」～「5.あてはまる」の５件法で回答するよう求めた。

２）BIS/BAS尺度日本語版（髙橋他, 2007）

BIS ７項目、BASのうち駆動（BAS-D） ４項目、報酬反応系（BAS-RR） ５項目、刺激探求（BAS-FS） ４項目の計20項目からなる尺度に対し、「1.あてはまらない」～「4.あてはまる」の４件法で回答するよう求めた。

また、回答者の性別および年齢を尋ねた。

結果

分析対象者

３時点の調査で２種類の尺度にもれなく回答した者は504名であった。この504名を分析対象者とした。ただし、性別および年齢に関しては欠損データがあり、504名の性別の内訳は男性221名、女性249名、無回答･その他34名であった。また年齢を回答した469名の平均は19.19歳（SD＝1.225）であり、18～29歳の範囲であった。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求とBIS/BASの相関

賞賛獲得欲求、拒否回避欲求の各欲求尺度得点、また、BISおよびBASの尺度得点、BASの３つの下位尺度得点を求めた。その平均値、標準偏差および信頼性係数 α の値をTable 1に示した。さらに各尺度得点の信頼性係数 α を算出した。これらの記述統計量の数値は先行研究で得られている値と類似していることが確認できた。

次に、尺度得点間の相関係数を算出した（**Table 1**）。賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の間に弱い正の相関（$r=.14, p<.01$）がみられた。賞賛獲得欲求と拒否回避欲求は互いに独立していることを前提として尺度が構成されている（小島他, 2003）が、複数のデータで弱い正の相関がみられることが確認されており、本研究のデータにおいても同様の結果になったものと考えられる。そして、BISとBASの間は無相関（$r=.00, n.s.$）となった。この点は弱い正の相関がみられた先行研究（安藤他, 2007）と異なっていたが、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の関係と同様、BISとBASは互いに神経基盤が異なることから独立した構成概念であることが想定されているため、本研究の相関分析の結果は、尺度の構成概念上は妥当な結果であると考えられる。なお、BISとBASの３下位尺度との相関関係については、先行研究の知見と一致した相関係数はBISとBAS-RRの間にみられた弱い正の相関（$r=.21, p<.01$）であった。先行研究では無相関であったBISとBAS-Dの間（$r=.-.09, p<.05$）、およびBISとBAS-FSの間（$r=-.10, p<.05$）に弱い負の相関がみられたが、これらは非常に弱い値であり、先行研究の知見と

Table 1　各尺度得点の記述統計量と相関係数

	記述統計量			相関					
	M	*SD*	*α*	拒否回避	BIS	BAS(全)	BAS-D	BAS-RR	BAS-FS
賞賛獲得	27.4	6.80	.83	.14 **	.09 *	.46 **	.34 **	.43 **	.33 **
拒否回避	31.5	7.26	.85		.65 **	-.10 *	-.18 **	.11 *	-.15 **
BIS	21.4	4.42	.82			.00	-.09 *	.21 **	-.10 *
BAS(全)	40.0	5.97	.83				.80 **	.80 **	.78 **
BAS-D	11.5	2.72	.82					.46 **	.39 **
BAS-RR	16.6	2.34	.68						.46 **
BAS-FS	11.9	2.51	.66						

** $p<.01$　* $p<.05$

矛盾しているとはいえない結果であった。

予測通り、賞賛獲得欲求はBASおよびBASの３下位尺度との間に中程度の正の相関（33～.46）がみられ、拒否回避欲求はBISとの間に強い正の相関（r=.65, p<.01）がみられた。これらの結果より、賞賛獲得欲求は目標の達成に向けて行動を解発する行動賦活系と、拒否回避欲求は行動抑制系と、それぞれ関連が深いとみなすことができた。

予測していなかった結果として、賞賛獲得欲求とBISとの間に弱い正の相関（r=.09, p<.05）が、拒否回避欲求とBASとの間に弱い負の相関（r=-.10, p<.05）がみられた。また、拒否回避欲求とBASの３下位尺度との相関では、BAS-D（r=-.18, p<.01）およびBAS-FS（r=-.15, p<.01）との間に弱い負の相関が、BAS-RR（r=.11, p<.01）との間に弱い正の相関がみられた。これらの値は全体的に低く、両者の間にはほぼ関連はないと考えることもできるだろう。ただし、本研究では先述の通り賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の間にも弱い正の相関がみられているため、一方の欲求を制御した偏相関を算出することで、２つの欲求とBIS/BAS尺度との関連を再確認することとした。

Table 2に偏相関係数を示した。まず、賞賛獲得欲求とBIS/BASとの関連については、拒否回避欲求の影響力を制御した結果、BISとの相関は無相関となり、BASおよびBASの３下位尺度との相関係数の値はそれぞれわずかに大きくなった。よって、賞賛獲得欲求は行動抑制系とは無関連で、行動賦活系と関連が深いと考えられ、対人関係において自己の肯定的な側面を認めてもらいたいという目標の達成に向けた行動の増加をうながす欲求であると考えられる。

一方、拒否回避欲求とBIS/BASとの関連については、賞賛獲得欲求の影響力を制御した結果、BAS-RRとの相関は無相関になったが、BAS-DおよびBAS-FSとの負の相関は係数が単純相関よりも大きくなった。そのためにBASと拒否回避欲求の負の相関の係数も大きくなったと思われる。よって、拒否回避欲求は行動抑制系と関連が深いとともに、行動賦活系（その中でも報酬を持続的に追求したり、刺激に衝動的に接近したりしようとする動機づけ）とは相反する欲求であると考えられる。

以上の単純相関および偏相関の結果は、いずれも予測と矛盾するものではなく、賞賛獲得欲求は行動賦活系と、拒否回避欲求は行動抑制系の気質と、それぞれ強く結びついていることが示された。

賞賛獲得欲求の下位尺度とBIS/BASとの関連

小島・太田（2012）では、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度に更なる下位因子が想定できるかを確認的因子分析および探索的因子分析を用いて検討し、拒否回避欲求が１因子にまとまるのに対し、賞賛獲得欲求は２因子に分けることも可能であるとしている。一方の

Table 2　欲求尺度得点を統制した偏相関係数

	BIS	BAS	BAS-D	BAS-RR	BAS-FS
賞賛獲得との偏相関（拒否回避を統制）	.00	.48 **	.37 **	.42 **	.36 **
拒否回避との偏相関（賞賛獲得を統制）	.65 **	-.19 **	-.24 **	.06	-.21 **

** p<.01

下位因子は「賞賛獲得_好印象」であり、尺度項目のうち「人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい」「自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる」「大勢の人が集まる場では、自分を目立たせようとはりきる方だ」「皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある」の４項目が該当する。もう１つの下位因子が「賞賛獲得_能力評価」であり、尺度項目のうち「高い信頼を得るため、自分の能力は積極的にアピールしたい」「人と仕事をするとき、自分の良い点を知ってもらうようにはりきる」「目上の人から一目おかれるため、チャンスは有効に使いたい」「責任ある立場につくのは、皆に自分を印象づけるチャンスだ」の４項目が該当する[2)]。

BIS/BAS尺度と賞賛獲得欲求の２下位尺度得点との相関係数をTable 3にまとめた。Table 1の賞賛獲得欲求とBIS/BASとの相関係数と比較して、両下位尺度得点とも係数に大きな差異はみられなかった。賞賛獲得_好印象とBAS-D（$r=.22, p<.01$）、BAS-RR（$r=.32, p<.01$）の係数の値がやや小さくなったものの統計的に差はなく、自分の存在を目立たせて大勢の注目を浴びたいという欲求も、自分の能力を他者に印象づけたいという欲求も、行動賦活系と深く関わるという点では差異がないことが確認された。

考察

本研究の目的は、自己呈示上の目標設定に関する個人差傾向である賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が、その基盤となる気質傾向としてBIS/BASを想定することが可能かを検討することであった。尺度得点を用いた相関分析、偏相関分析の結果、賞賛獲得欲求はBASとの間に中程度の正相関がみられ、拒否回避欲求はBISとの間に高い正相関が示されたことから、仮説を支持する結果が得られた。一方、賞賛獲得欲求はBISとは無相関であることが確認できたが、拒否回避欲求はBASとの間に弱い負の相関が確認された。予測と矛盾する結果ではないが、これらの結果、また、賞賛獲得欲求の下位因子とBASの下位因子間との中程度の正相関が得られた結果もふまえ、以下に考察を述べていく。

まず、賞賛獲得欲求はBASおよびBASの３下位尺度得点と中程度の正の相関があった。これらの結果は仮説を支持する結果であった。この結果から、他者からの肯定的な評価を獲得したいという自己呈示上の目標設定は、行動賦活系の気質であるBASを基盤として抱くようになることが想定される。他者からの肯定的な評価が一種の報酬として機能することにより、肯定的な評価に接近するための個人傾向としての賞賛獲得欲求が形成されていく過程が考えられるだろう。

賞賛獲得欲求の下位因子（好印象、能力評価）とBASおよびBASの３下位尺度得点との

Table 3　賞賛獲得欲求の下位因子得点との相関係数

	賞賛獲得	拒否回避	BIS	BAS(全)	BAS-D	BAS-RR	BAS-FS
賞賛獲得_好印象	.85 **	.15 **	.16 **	.36 **	.22 **	.32 **	.32 **
賞賛獲得_能力評価	.85 **	.07	-.02	.44 **	.35 **	.43 **	.28 **

** $p<.01$

相関については、係数に多少の差異はあってもほぼ同様に、中程度の正の相関が得られた。よって、報酬を積極的に求めること（駆動）、与えられた報酬への肯定的な反応（報酬反応性）、衝動的な接近傾向（刺激探求）といった行動賦活系の細かい違いが、賞賛獲得欲求の下位因子のどれかを規定するといった関係性は考えにくい。どのような側面について他者かの肯定的な評価を求めやすいかという賞賛獲得欲求の内容については、気質による影響よりも、成長していく過程での経験の影響の方が大きい可能性が考えられよう。

次に、拒否回避欲求はBISとの間に高い正の相関がみられた。この結果は仮説を支持する結果であった。新奇な刺激に対する不安や脅威、罰の存在に対する不安や脅威と関連する行動抑制系の気質は、自分に対する他者からの否定的な評価を回避したいという自己呈示上の目標設定の基盤となると考えられる。ただし、予想外の結果として、拒否回避欲求はBASとの間に弱い負の相関がみられた。BASの下位因子との間にも、報酬反応性を除く２つの下位因子（駆動、刺激探求）との間に弱い負の相関が示された。つまり、行動賦活系の気質が弱いことが拒否回避欲求の強さにつながる可能性が示唆された。この点については、見かけ上の相関関係であるのか、それとも、拒否回避欲求の形成がBISとともにBASも関連して形成されるものであるか、検討を重ねる必要があるだろう。とはいえ、拒否回避欲求とBASとの弱い負の相関はみかけ上の相関関係を示唆していると考える方が妥当であると思われる。まず、賞賛獲得欲求とBASとの相関に比べ、拒否回避欲求とBISの相関係数の値が非常に大きい。そして、拒否回避欲求は他者からの否定的な評価に対し不安・恥といったネガティブな感情を抱きやすくさせるとともに、他者からの肯定的な評価に対する照れの感情という、必ずしもポジティブではない感情を喚起することが示されている（小島・太田・菅原, 2003）。肯定的な評価に対するポジティブではない感情的反応につながる拒否回避欲求は、不安や脅威の活性化につながるBISと強い共通性をもつと思われる。よって、本研究の結果から、BASは賞賛獲得欲求の基盤となる気質で、BISが拒否回避欲求の基盤となる気質であるととらえることが妥当な解釈であろう。

引用文献

Carver, C.S. & White, T. L.（1994）. Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.

Gray, J.A.（1970）. The psychophysiological basic of introversion-extraversion. *Behavioral Research and Therapy*, **8**, 249-266.

Gray, J.A.（1982）. *Neuropsychological theory of anxiety*. New York: Oxford University Press.

Gray, J.A.（1987）. *The psychology of fear and stress*. Cambridge: Cambridge University Press.（八木欽治 訳（1991）. ストレスと脳. 朝倉書店）

小島弥生・太田恵子（2012）. 賞賛獲得欲求の下位構造に関する検討. 日本社会心理学会第53回大会発表論文集, 287.

小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, **11**, 86-98.

国里愛彦・山口陽弘・鈴木伸一（2007）. パーソナリティ研究と神経科学をつなぐ気質研究について. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, **56**, 359-377.

菅原健介（1986）. 賞賛されたい欲求と拒否されたく

ない欲求：公的自意識の強い人に見られる２つの欲求について．心理学研究, **57**, 134-140.
菅原健介（2004）. 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求．菅原健介（編著）ひとの目に映る自己：「印象管理」の心理学入門, 金子書房, pp.163-164.
髙橋雄介（2013）. 気質とパーソナリティ．二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之（編）パーソナリティ心理学ハンドブック, 福村出版, pp.78-84.
髙橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁桝算男・大野裕・安藤寿康（2007）. Grayの気質モデル：BIS/BAS尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討．パーソナリティ研究, **15**, 276-289.

脚注

１）厳密に述べるとGrayは３つの動機づけシステムについて検討している。彼が検討した第３のシステムは闘争･逃走システム（fight-flight system; FFS）である。FFSは無条件な罰刺激に対して活性化するシステムとされているが、動物の行動に関してはあてはまりがよくても人間の行動にはほとんどみられないとされている。Grayの気質モデルに基づく尺度作成は多くの研究者によって行われているが、FFSを含まない尺度構成の方が一般的であり、本研究でも先行研究の尺度構成に従い、BISとBASの２つのシステムについてのみ想定することとした。

２）賞賛獲得欲求尺度は９項目であるが、下位因子を検討した際には第５項目の「初対面の人にはまず自分の魅力を印象付けようとする」は「好印象」と「能力評価」の両方に一定の因子負荷量をもつ項目となった。そのため、本研究における下位尺度の相関の検討においては、この項目を除外した４項目ずつで下位尺度得点を算出している。